

[エッセイ]

私たちのドイツ留学体験記

岡崎真美：留学を終えて

私は2年生の秋から半年間ゲッティンゲン大学に留学しました。高校2年生の時からドイツ語を勉強し始め、いつか絶対にドイツに留学したいと考えていたので、交換留学生に選ばれた時はやっと夢が叶うと思いました。留学が決まる前からドイツ語はそれなりに勉強していましたが、決まってからは何よりも優先してやったものです。確かにドイツに行くのは楽しみではありましたが、半年も海外で暮らすのかと思うといくら勉強しても不安でした。現地に行ってから苦労しないようにと十分備えて行ったつもりでしたが、留学した当初は、やはり準備しきれなかったことと予想もしなかったことがたくさんあって、想像以上に追い詰められました。両親にも「そんなにつらいのなら一時帰国したらどうか」と言われました。「こんなはずじゃなかった」と思うことが何度もあって、精神面も肉体面も正直ボロボロでした。余りにも自分の成長を実感できなくて、「何故ここに来たんだろう」だとか、「そもそも才能がないのかな」とか、どうしようもないことを考えだすと、なかなか勉強する気になれませんでした。最初はもちろんドイツ語がもっとできるようになりたいという思いで日々生活していましたが、留学して2ヶ月経った頃には、そのような状態からとりあえず自分でできることをやろうと思い始めました。「私がこれまで頑張ってきたことが報われない」そうは考えたくなかったのです。

12月になると少しは自分の成長を認識できました。最初は友人と話していても何を話しているのか分からない部分が多く、私自身も全然話せなかったので申し訳なく思っていたのですが、4割から7割へとだんだん分かるようになって、講義やゼミの内容も少しは頭に入るようになりました。

そして2月の学期末テストが終わり全科目の成績をもらうと、自分はよく頑張ったと思いました。もちろん私よりもドイツ語ができる人なんてたくさんいましたが、この留学をやり切ったのだということだけでよかったのです。

この前、高校の時のドイツ語の先生に会いました。私はこれまで多くの方からドイツ語を教えてもらいましたが、その先生は私に初めてドイツ語を教えてくれた方です。先生とは留学前にもお会いして、いろいろと話をしましたが、留学中のドイツでのことを話すと、「よく頑張った」と言ってくれました。

私は幼少期をほとんど病院で過ごしたので海外に行くことなんてないと思っていましたし、人と話すのが苦手なので言語を専門にやることになるとは思いませんでした。それでも思い切って「ドイツ語をやりたい」と言って、この道を進んできたことに満足しています。

ドイツ留学を今後どう活かしていくか、まだ明確には決まっていませんが、出来れば今回の貴重な経験を就職にも活かしていきたいと考えています。そして必ず、またドイツに行きたいと考えています。いい機会を与えてくださり、これまで援助していただいた先生方、先輩方、友人、そして両親に感謝します。

小西優貴：ドイツのスマートフォン奮闘記

私の部屋の片隅、散らばる卒業論文の資料の白色に混じって、一台の白いスマートフォンが転がっている。確かに機種としてはもう古いし、私はアンドロイドのOSがあまり好みではない。だが、それはこのスマートフォンが埃をかぶって部屋の隅に埋もれているのとは何の関係もない。こいつは何も悪くない。悪いのは私なのだ。

去年の三月から一年の間、ドイツのゲッティンゲンで留学生として生活をしていた。小さい街ではあったが、初めて独りで海外に飛び出すのだ。私にとっては大冒険には違いなかった。思えば、あの留學生活、私は何かを体験しようと必死だったように思う。「自分で一度やってみよう」という冒険心にあふれていた。例のスマートフォンも、この冒険による

獲得物の一つだった。

「連絡取るのに携帯が欲しいなら私がついて行ってあげるよ」というタンデムパートナーの申し出を断腸の思いで断ったのを覚えている。というのも、ドイツ人にとっては当たり前で、でも留学生なんかにはちょっぴりハードルが高いこと、例えば眼鏡を自分一人で新調してみたり、ドイツで携帯電話の契約を自分で成し遂げたりする、というのが私のちっぽけな目標だったのだ。私は意を決して家電量販店 SATURN に向かった。契約は思ったよりもすんなりと結ぶことができた。陳列されている中で一番安いスマートフォンに、月々10ユーロほどの一番安いプランだ。「なるほど、こんなものか。上手くいくもんじゃないか。はっはっは」とその時こそ満足気にしていたわけであるが、今の私にはそんな自分がまぬけに思えてならない。あの時の私は、「他の国で契約を結ぶ」ということを完全になめていたのだ。

違和感に気づいたのは帰国して3か月ほどたったころだった。メールボックスに不穏な知らせが届いていた。差出人はドイツの某携帯電話会社。件名は「今月の利用料金についてのお知らせ」であった。どういうことだ、と思った。携帯電話の契約は確かに解約してきたはずだ。そう、銀行の口座と一緒に。店舗での解約は受け付けていないから、メールか手紙を本社に送れ、と言われてそうしたじゃあないか。そうだ、白々しく残念がるような一文から始まる、解約を受け付けた旨のメールも受け取ったはずだ。

メールを読み直して気づいた。ドイツの携帯電話の契約形態は日本と決定的に異なるのだ。当たり前のことはずなのに、どうして気づかなかったのだろう。 — 「以下のことにご注意ください：回線は2018年×月×日に使えなくなります。上記の日付までは、基本料金などの月々の料金を請求いたします ...」

日本の携帯会社の場合、例えば二年契約を満期まで待たずに破棄する場合、違約金を支払っておしまいである。ところがドイツではそうはいかない。一度二年契約を結んでしまえば、途中で解約の旨を伝えようが、二年間きっちりその契約の下にサービスを受ける義務があるのだ。もちろん対価の代わりに。問題なのは制度が日本と異なることではない。そんな大事なことに帰ってきてしばらくしてから初めて気づいてしまった

ということだ。

どうしよう、とりあえず気づかなかった間の料金を支払わなければ。だがどうやって？自動引き落としに指定していたドイツ銀行の口座はとくに解約している。振り込むこともできるが、日本からの振り込みではとんでもない手数料がかかってしまう。とりあえずは、まだドイツに滞在している日本人の友達に振り込みの代理をしてもらうことにした。だが、契約の満期まで彼に頼るわけにはいかない。そのころには彼もとくに帰国している。気が気でなく、インターネットに釘付けになって情報を漁った。高い通話料金も気にせず、ドイツの某携帯電話会社のサポートに電話をかけてみては、たらいまわしにされたりした。返信に2週間ほどかかるサポートにメールを出してみたりもした。この間に何度この契約を結んだことを悔いたかわからない。

調べて得た情報をまとめてみると、結局のところ、ドイツから他の国に出る場合には特別な書類を用意して、特別な解約をする必要があったということだった。なんて簡単なことだったのだろう。一度「日本の市役所で新しい住居登録証明をもらってこい」などと電話口で言われた時はお手上げだと思ったが、これも新しいアルバイトの契約書で代用できた。書類をそろえて送ってみたが、まだそわそわして気分が落ち着かなかった。なんせ、毎月20日になると料金請求のメールがドイツから送られてくるのだ。この時にはこのメールも帰国してから5通目ほどになっていた。

また二週間ほどしてサポートからメールが来た。どうやら特別解約が受け付けられたらしい。最後に違約金として三か月分の基本料金を支払えばこれから解放されるとのことだった。やっとこの悩みから解放されるのだと思うと心が軽くなった。自分でちゃんと契約を結べた時よりもうれしかったかもしれない。翌月の20日、前の月と同じ件名の料金請求のメールが来ていた。先月と違うのは請求料金が0ユーロと表記されているところだ。ああ、終わったのだ、と思った。ドイツで挑んだちっぽけな冒険はやっとこの時終わったのだ。

「ドイツ留学」で最初に思い出すのがこの話なのだから、笑ってしまう。私があの白いスマートフォンに埃をかぶらせる理由も理解していただけたのではないかと思う。自慢したくなるような成功体験、よいこと素敵

なことはもちろんたくさんあった。それでも、「日本とドイツが違うこと」を私の心の芯に理解させたのは、皮肉なことに、この体験なのであった。

年綱静香：再びのドイツ

私は2017年の10月からワーキングホリデービザでドイツに滞在しており、有難くも機会をいただいてこの体験記を書いているが、在學生でもなければ研究生でもない。単なる卒業生である。しかも現在は退職してしまったが、就職先はまったくドイツとは関係なかった。本題のドイツ体験記に入る前に、そんな私がドイツに来るに至った経緯を少し述べたいと思う。

関西大学のドイツ学専修には交換留学をする機会が、少なくない割合で用意されているものの、私が在学中にその制度を利用することはなかった。決して行きたくなかったわけではなく、むしろその逆だったが、すでに親にかなり金銭的な負担を掛けていたので、長期滞在は就職して自分で費用を稼いでからと決めていた。ただ、幼い頃からヨーロッパに強い憧れがあった私は、やはりどうしても行ってみたくて、貯めたバイト代で3回生の夏に1ヶ月間の、ゲッティンゲン大学への語学セミナーに参加した。毎日があつと言う間で、夏のドイツの過ごしやすさも手伝ってか、ただただ楽しかったという印象しかない。その時の思い出と留学したかったというのが結局未練になって、今回のドイツ滞在に至ったのである。

日本から住居を探すのは難しいと思われたので、最初の4ヶ月は語学学校に通いその寮に滞在することにした。冬の間通おうと思っていたので、とにかく暖かいところが良く、はじめはドイツで最も暖かく環境都市としても有名なフライブルク（Freiburg im Breisgau）で探していたが、ドイツ国内でも人気の都市であるため家賃が高く早々に断念した。そこで白羽の矢が立ったのが、同じくバーデン＝ヴュルテンベルク州のハイデルベルクである。ハイデルベルクと言えばドイツ最古の大学がある学生の町として有名で、更に観光地としても人気があり、外国人率も日本人率も低くはないのだが、ハイデルベルク大学に Japanologic（日本学科）

があり、Tandem パートナーが見つけやすいことにも惹かれて、そこに決めた。いわば滞在先を気候で決めたようなものだが、他の町を訪れた際に自分の選択の正しさを実感した。本当に他の都市に比べて暖かいのである。私のようにドイツの冬に怯んで留学等に悩んでいる人には是非ともお勧めしたい。しかもドイツの建物は基本的に所謂セントラルヒーティングのため、今のところ正直日本よりも快適に過ごせている。

語学学校は事前の情報の通り、大学への進学を希望している学生が主で、卒業してからすでに5年経過している身では大抵が随分と年下になるわけだが、du と Sie の区別はあれど、日本語のように明確な敬語がないこともあってか、皆気軽に接してくれる。国の比率的には中国人とチュニジア人が多く、アジア系は基本的に読み書き・文法に強いがその他の国の子はよく喋る。なお、私は聞き取りが壊滅的で要件はドイツ語で伝えられるが、その後の答えが聞き取れず英語で言い直してもらうということをはじめの内は繰り返していた。その度に微妙な敗北感を味わっていたわけだが、今ではほぼやり取りをドイツ語で完結できるようになってきたので少しは上達したのだろう。ただスーパーなどでいきなり何の話題か分からない状態で話しかけられるのは、未だに聞き取れない。残りの滞在期間でここも改善すれば良いのだが。

ところで、私のハイデルベルク滞在を後押しした Tandem についてだが、ちょうどハイデルベルク大学の秋 Semester が10月から始まったこともあり、さほど苦勞せずに見つけた。ハイデルベルク大学の Japanologie がある建物は学外生も立ち入り可能で、そこにある掲示板に Tandem パートナー募集の貼り紙を貼りに行った。ドイツの貼り紙と言えば、募集事項を書いた紙の下部分を小さく切って、そこに記載された連絡先を破って持っていけるようにしてあることが多いが、学生時代に聞いたそれを自分でも作ってみた。日本だとあまりないアナログな手法なので正直半信半疑だったのだが、貼り紙をして程なく2人から連絡があり、その内の1人と今も Tandem をしている。嬉しいことに年の近い女の子で、当時彼女が日本語を勉強し始めてまだ3週間ということもあって、会話は基本的にドイツ語で行った。彼女の表現からは学ぶことも多く、これはドイツに来なければ得られない経験だったと思う。なお、私の通っている語学学校には異文化トレーニングという、自国文化を現地の外国人に

紹介するというプログラムがあり、私はそれにアシスタントとして参加したのだが、そのセミナー後の *Stammtisch* で出会ったルーマニア人の女の子も本当に良い子で、彼女たちとの出会いは当時少し落ち込んでいた私の気分をおおいに浮上させてくれた。就職したときも思ったが、良き人に恵まれるというのは一番の幸運だと思う。

語学学校を終了してから旅行等は楽しもうと思っていたが、とは言え全くどこにも行かないというのはつまらないので、観光で来た際にはあまり立ち寄れないようなところいくつか出掛け、またドイツの冬に欠かせない *Weihnachtsmarkt* には可能な限り足を運んだ。ハイデルベルクは勿論、フランクフルト、ニュルンベルク、ローテンブルク、シュトゥットガルト…。12月に学校終了後の部屋探しのためデュッセルドルフも訪れたが、一歩外に出れば雪だるまになるような吹雪だったので、*Weihnachtsmarkt* は見られなかった。ちなみに前回の滞在時は1ヶ月ということもあってジャーマンレイルパスで主に電車を利用していたが、今回の移動はほぼバスである。ドイツは鉄道に比べて長距離バスの値段が破格なほど安く、また電車だと乗り換えが必要なところ、バスだと直通で行けたりする。加えて荷物はバスの荷物入れで預かってくれるので、一人旅だと難儀しがちな移動時の荷物管理が不要。実はちょうど私が来た10月に通常62ユーロする、長距離電車25%オフの *BahnCard25* が何かの25周年記念で25ユーロで買えるというキャンペーン中だったので購入したが、バスの快適さのため未だ使われないままである。ただ ICE は結構快適なので滞在中に何回かは利用したい。

なお、この *BahnCard* の申し込みやバスのチケットの購入等はすべて Web とスマートフォンのアプリからである。ついでに言うとそのスマホの SIM も電気屋で購入したあとアプリを使ってビデオ通話で身分証明をし、開通してもらっている。月々のチャージも SMS かアプリでコードを入力すれば完了。便利ではあるし、読むことさえできれば手続きに迷うこともないが、会話の機会もあまりない。ドイツに来る際に主に言語面での心配をされたが、今の時代代替手段はいくらでもあると思っていたら、良くも悪くも案の定である。ただドイツ人は話し好きの人が多いいのか、こちらが多少ドイツ語を話せると分かるといういろいろ話しかけてくれたりするので、自主的に望めばその機会は少なくはない。

しかし、いくら電子化が進んだとは言え、住民登録は直接 Bürgeramt に行き行こうし、ドイツにはコンビニがなく、印刷やコピーが必要な場合はコピーショップに行かなければならない。そこでは有人対応のため、お店のおじさんに要件を話す必要があるし、日本では口座がなくとも ATM から現金振り込みできるが、ドイツでは口座がないと窓口に行く必要があるし、口座開設のためには職員との面談が必要である。日本でも対人の手続きを避けがちな私としては面倒に思う（特にコピー）反面、無事用事が終わったときの達成感はなかなかである。

ドイツに来てドイツ語を勉強していると「何故ドイツ語を勉強しているのか」と、必ずと言っていいほど聞かれる。実際会話の切っ掛けとしては無難な問いなのだが、私にとっては最も答え難い質問の1つである。ドイツ語の勉強は嫌いではないし、ドイツには来たかったので来た、としか答えようがないのだが、確かに目的もなく来るには失うものが大きい。当然奨学金などないので一銭も貰えないどころか、しっかり税金は引かれるし、収入はゼロになるのに支出は増える。加えて社会人になってから、必要もないのにドイツ語を勉強するのはモチベーションの維持も簡単ではない（ドイツで初めから学び直してもいいのだが、私は自分自身への渡航条件として少なくとも学生時代の語学力を維持できることを課していた）。当時の自分の選択には納得しているが、興味と機会があるなら在学中に留学することをお勧めする。

とは言え、社会人を経験してからの渡航も悪いことばかりではない。仕事をして興味の幅が広がったし、日本の良いところも悪いところももっと直接的に知って、より冷静に物事を見られるようになった。学生時代は今思えば盲目的にドイツに住みたかったが、今は、可能かどうかは別にして、日本とドイツのどちらが自分に合っているのか、改めて考え直している。

今回この体験記のお話をいただいた際、もう学生でないのにいいのだろうかと思う一方で、一度ドイツから離れた自分が伝えられることはなんだろうと考えた。内容は割とありきたりになってしまったが、だからこそ、一度離れてからでも、できないことはないと感じた。あの頃行っておけば良かったと思っても、別に遅いということはないと思う。残りのドイツ生活も目一杯楽しんで満足のいくものにしたい。